HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	手続き的意味による中国語談話標識「怎么说」の分析
Author(s)	楊, 雯淇
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 26, 91-107
Issue Date	2018-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68745
Type	departmental bulletin paper
File Information	91-107_Yang.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

手続き的意味による中国語談話標識「怎么说」の分析

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院　博士課程
楊　雯淇

An analysis of the Chinese Discourse Marker *Zenmeshuo* by procedural meaning

YANG Wenqi

abstract

The present study aims to analyze the Chinese discourse marker *zenmeshuo* by procedural meaning. Briefly reviewing the notion of *activation* proposed by Wharton (2003, 2009) and the *massive modularity hypothesis* introduced by Wilson (2011), I propose that the "procedural meaning" of *zenmeshuo* activates the hearer's *epistemic vigilance module* (Sperber et al. 2010). It helps the hearer to recognize the speaker's uncertainty at some levels of speech production and facilitate further inference so that a higher-level explicature could (but not necessarily) be constructed, with its reported functions, such as alleviation of the speaker's responsibility, and euphemism, derived as side effects. I will firstly outline the theoretical background of procedural meaning. Secondly, I will review the previous studies of *zenmeshuo* and discuss their problems. Then, I will propose an analysis of *zenmeshuo* and show that the hearers' cognitive mechanism can be better captured by the activation-based procedural meaning than by the constraint-based one.

1 はじめに

発話を構成する言語表現の意味は、聞き手にとって、計算の対象になる命題的表示の構成要素に関わるものと、計算自体、すなわち心的過程に関わるものがある。関連性理論の枠組みでは、前者は概念的意味（conceptual meaning）、後者は手続き的意味（procedural meaning）と呼ばれている（Blakemore 1987）。この区別に基づいて、英語や日本語における様々な談話標識や間投詞は手続き的意味を持ち、聞き手の発話解釈を方向づけるものとして分析されてきた。近年、Wharton（2003，2009）は、英語の間投詞の分析において、これまで推論への「制約（constraint）」として特徴づけられていた手続き的意味を、「活性化（activation）」という概念を用いて特徴つけることによって発展させた。その後、Wilson（2011）は、広範囲のモジュール性（massive modularity）という仮説を取り入れ、「活性化」を用いた手続き的意味の特徴づけをさらに発展させた。人間の心はモジュールと呼ばれる、多くの特定の機能を持つメカニズムで構成されているという仮定に基づいて、Wilsonは、手続き的表現の分析において、たとえば、聞き手が発話を解釈する際には、「推論的理解モジュール（inferential comprehension module）」（Sperber and Wilson 2002）に加えて、「認識的警戒モシジュール（epistemic vigilance module）」（Sperber et al. 2010）も働くことがあることを考えることが重要であると主張した。

本稿は現代中国語における談話標識の「怎么说」に焦点をあて、それが認識的警戒モジュールを活性化する表現の一つであることを示し、手続き的意味を用いた分析を提案する。この分析は、従来の「怎么说」の分析とは異なり、聞き手による発話解釈の認知メカニズムを明確に示すものである。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、本稿が行う分析の理論的背景、すなわち手続き的意味の研究の発展について簡単に説明する。第3節では、中国語談話標識「怎么说」の先行研究を概観し、問題点を指摘する。第4節では、活性化の概念に基づく「怎么说」の手続き的意味の分析を提案し、この分析では第3節で指摘した問題が生じないことを示す。最後に、第5節はまとめと今後の課題である。

2 理論的背景：手続き的意味の史的変遷

2.1 「制約」に基づく手続き的意味の概念[1]

Blakemore（1987）によって提案された手続き的意味は、当初、一部の談話標識[2]がコード化した、推意（implicature）を制限する制約として考えられ

►1 2.1節は楊（2016：184-185）の一部を修正したものである。

►2 Blakemore（1987）は当初考察した手続き的表現を談話連結語（discourse connective）と呼んでいたが、本稿では談話標識（discourse marker）という名称を使用する。

楊 雯淇 YANG Wenqi

ていた。たとえば、(1)－(3) の発話で推意がどのように制限されるか見てみよう。

(1) a. Tom can open Bill's safe. b. He knows the combination.（結論／前提）
(2) a. Tom can open Bill's safe. b. *So* he knows the combination.（結論）
(3) a. Tom can open Bill's safe. b. *After all* he knows the combination.（前提）
（Blakemore 1987, 2000）

(1b) の発話には少なくとも2つの解釈がある。1つは、(1b) の発話が表している命題「Billは番号の組合せを知っている」は (1a) の「TomはBillの金庫を開けられる」の結論であるという解釈である。もう1つは、逆に、(1b) の「Billは番号の組合せを知っている」は (1a) の「TomはBillの金庫を開けられる」の前提であるという解釈である。しかし、(2) と (3) に見られるように*so*や*after all*のような談話標識を加えると、(1b) の発話の解釈が (1a) の発話の結論か前提のどちらか1つに制限されるようになる。

手続き的意味が提案された当初は、上の例で示したように、推意の構築における聞き手の推論に制約をかけると考えられたが、その後の手続き的意味の研究の発展に伴って、手続き的意味が制限する対象は表意（explicature）にまで拡張された。表意は、さらに基礎表意（basic-level explicature）と高次表意（higher-level explicature）に分けられる。

(4) Peter：Will you pay back the money by Tuesday?
Mary：I will pay it back by then.
(5) Mary will pay back the money by Tuesday.
(6) a. Mary is promising to pay back the money by Tuesday.
b. Mary believes she will pay back the money by Tuesday.
（Sperber & Wilson 2004）

(4) では、Maryの発話の代名詞や指示詞の解釈は、それが持つ手続き的意味によって、聞き手の推論が制限され、具体的な指示を指し示す名詞で置き換えられ、(5) のような基礎表意（Mary will pay back the money by Tuesday）が伝達される。また、発話の特定のイントネーションなどが持つ手続き的意味が、聞き手の推論を制限し、(6a, b) に見られるように、「約束している」または「信じている」のような発話行為や命題態度等を反映する高次表意が伝達される。このように、現在では、手続き的意味は推意と表意の両方の構築に制約をかけることができるという考え方に一般化されている。

2.2 「活性化」に基づく手続き的意味の概念[3]

聞き手の発話の理解における推論を制限し、推意や表意の構築に貢献する手続き的意味を、本稿では、制約に基づく手続き的意味と呼ぶ。一方、Wharton（2003, 2009）は手続き的意味に基づいた間投詞（interjection）の分析において、「制約」の代わりに、「活性化」に基づく手続き的意味の概念

►3 2.2節は楊 & 上田（2017：236）の一部に加筆・修正したものである。

を提案した。それは、間投詞の手続き的意味は、聞き手の理解の一部になる高次表意の構築に貢献するものと考えられる場合と考えられない場合があり、後者は「制約」では説明が難しいからである。たとえば、(7) では、*wow*によって、話し手の命題態度に関する聞き手の推論が制限され、(8) に示したように「話し手は（聞き手の）私がここにいることを喜んでいる」という高次表意が構築されると説明することができる。

(7) *Wow*! You' re here.
(8) The speaker is delighted that I am here.

(Wharton 2009: 87)

しかし、(9) (10) における間投詞は、高次表意に貢献するものとは考え難いとWharton（2009:87）は主張する。Whartonによると (9) (10) では、「伝達される態度は命題に対する態度ではなく、対象物に対する態度であり、*wow*はアイスクリームまたはその味に対して、*yuk*は口内洗浄液あるいはその味に向けられている」のである。さらに、(11) では、*yuk*は発話として自立していて、その後になにも発話されていない。そのため、*yuk*は聞き手の推論に制約をかけ、高次表意の構築に貢献するとは説明し難い。

(9) *Wow*! This ice cream is delicious.
(10) *Yuk*! This mouthwash is foul.
(11) Child：(taking foul-tasting medicine) *Yuk*!

(Wharton 2009)

このように、談話標識には、一般的に命題が後続されているため、その談話標識は、聞き手が行う前後2つの命題の関係についての推論や、ある種の命題態度や発話行為に埋め込まれた高次表意の構築における推論を制限するものと考えられていた。ところが、それに対して、間投詞は独立で使用される場合や、一見命題が続くように見えるが、実際には命題ではなく、物自体や特定の心的状態が当該の間投詞の対象となっている場合がある。このため、これまで談話標識に対して行なわれていた分析とは異なり、このような間投詞は命題表示を処理する際に働く推論への制約・指示という手続き的意味を持っていると分析することは難しい。そこで、Wharton（2009：65）は、代わりに多様な手続き的表現に適用できるより広い観点で手続き的意味を捉えるべきであると主張し、推論過程への制約や指示ではなく、「(たとえば概念的表示や計算あるいは期待の）活性化のレベルの管理」という手続き的意味の捉え方を提案した[4]。この捉え方では、間投詞は態度を示す概念を活性化すると考えられる。たとえば、*wow*は、「喜び、驚き、興奮などを連想させる様々な態度を表す記述を活性化する可能性があり」、また、*yuk*の場合は、活性化されうる態度は「嫌悪感あるいは反感の1つである」(Wharton 2009：90)。Wharton（2009：65）によると、間投詞のほか、代名詞や法標識、談話標識などの手続き的意味の説明も「活性化」を用いて一般化できる。代名詞はあ

►4 Wharton（2003, 2009）では「activate」「trigger」という用語を使用しているが、その定義を明確に示していない。

楊 雯淇
YANG Wenqi

る一定の範囲の指示対象の候補を活性化し、法標識は特定の範囲の命題態度の記述を活性化し、また、談話標識は特定の推論の手続きあるいは認知効果の期待を活性化すると考えられる。

このWhartonの提案に従って、Unger（2012：47-48）は、たとえば、談話標識*so*の手続き的意味を、下のように説明している。

（12）a. Jane's students play the violin very well.
b. She's an excellent teacher.
Procedure A: Assume U (=12b, WY) is a premise. Find other assumptions, see whether they can be used as premises, and compute conclusions.
Procedure B: Assume U (=12b, WY) is a conclusion. Find other assumptions that can be used as premises in an argument supporting U as a conclusion.
（Unger 2012：47-48）

（12）の発話を解釈する聞き手は、（12b）は、（12a）を含んだ前提から得た結論なのか、それとも（12a）を説明するための前提なのかを算定する必要がある。Ungerは、A、Bという2つの手続きを仮定し、これらの活性化という観点から（12）の発話の解釈を説明している。聞き手が（12b）を処理する際には、上述の手続きA、つまり「（12b）を前提であると仮定し、他の想定を探して、それらの想定も結論を計算するための前提として使えるかどうかを考える」という手続きと手続きB、つまり「（12b）を結論であると仮定し、（12b）が結論であることを支持する、他の前提になりうる想定を探す」という手続きが潜在的に候補とされる。そうして、これらの手続きの中の1つから生じた認知効果が聞き手の関連性の期待を満たした時点で処理が止まるのである。Ungerによると、各手続きがそれ自体の活性化のレベルを持っており、談話標識*so*が持つ手続き的意味は手続きBの活性化レベルを昇格し、手続きAの活性化レベルを降格させるのである。

2.3　モジュールの活性化[5]

►5　2.3節は楊＆上田（2017：236-237）の一部に加筆・修正したものである。

Wilson（2011，2012）は、広範囲のモジュール性（massive modularity）と呼ばれる、人間の心／脳は特定の役割や機能に特化したモジュールからできているという進化心理学の仮説を取り入れて、手続き的意味を持つ表現がモジュールを活性化することを主張し、活性化に基づく手続き的意味の概念をさらに発展させた。これまでの「制約」と「活性化」で特徴づけられた手続き的意味は、聞き手の検索の範囲を狭めることによって、理解のプロセスを方向付けるものと考えられてきた。言い換えると、手続き的意味の働く領域は、推論的理解のモジュールに限られていたと考えられる。広範囲のモジュール性という仮説を取り入れることで、手続き的意味の働く領域が拡張される。Wilson（2011，2012）は、手続き的表現は、推論的理解（inferential comprehension）だけを活性化するのではなく、読心（mindreading）や、感情の読み取り（emotion reading）、社会的認知（social cognition）、構文解析（parsing）および発話産出（speech production）などに関わる様々なモジュールあるいは

その下位モジュールを活性化する可能性を考える価値があると主張した[6]。たとえば、間投詞（*wow, yuk*）や感情を表すイントネーションなどは、感情を読むモジュールを活性化する手続き的意味を持つと考えられる。

実際に、認知科学の分野では、言語表現と心の働きとの関わりを示す事例が報告されている（松井2013, Matsui et al 2016）。たとえば、人間はすべての伝達された情報を同じように信頼するのではなく、偶然または意図的な誤報のリスクを避けるための「認識的警戒（epistemic vigilance）」能力が備わっており（Sperber et al. 2010）、3歳の日本語母語話者の子供は、「よ」「かな」のような文末助詞をもとに話し手の確定・不確定性を見抜くことができる（Matsui et al. 2016）。もし認識的警戒というモジュールがあるとすれば、「よ」「かな」はこのモジュールの活性化と関わりがあると考えられる（Wilson 2011）。本稿では、後述するように、中国語の「怎么说」は中国語母語話者の認識的警戒モジュールに関わる言語表現の一つであると主張する。

3 談話標識「怎么说」の先行研究

認識的警戒を活性化するという手続き的意味の分析を提案する前に、まずこれまでの「怎么说」の先行研究を整理する。

3.1 「怎么说」の出現形式と機能[7]

本稿では、(13) に見られるような、文から独立し、文の真理条件的意味に影響を与えない「怎么说」に焦点を当てる。先行研究では、このような「怎么说」は談話標識と呼ばれ、日常会話に頻繁に出現し、助詞の「啊」や「呢」が付加された「怎么说啊」「怎么说呢」などの変異形もあると指摘されている[8]。

(13) 社会　治安　吧，　怎么说，我　总觉得　比较　乱。
　　社会　治安　助詞　怎么说　私　どうやら　わりに　秩序のない
　　（社会的治安はね、怎么说、わりに混乱しているように思う[9]。）
　　（刘（2013：43）より修正後引用、日本語訳は筆者よる）

刘（2013）は談話標識の「怎么说」について、出現位置を分類して、それぞれの具体的な機能を述べている。発話の冒頭に使用される「怎么说」は、応答の始まりを示し、後続する情報の性質（複雑であるかまたは否定的か、微妙（センシティブ）である）を示唆することができる[10]。(14)－(16) の例を見てみよう。

►6 厳密に言うと、Wilson（2011）は手続き的表現はモジュールが持つ領域固有の手続き（domain-specific procedures）を活性化すると提案している。また、Unger（2012）は、手続き的表現は複数の発見的手続き（heuristic procedures）の中の特定の手続きの活性化レベルを高めることの引き金になると述べている。さらに、Sperber（2005）は、モジュールが独自の手続きやデータベースを持つ可能性があり、学習によって、データベースの拡大や下位モジュールが加わる可能性も考えられると示唆している。本稿では、モジュールの内部構造については今後の課題とし、手続き的表現はモジュールそのものを活性化すると仮定する。

►7 3.1節は楊（2016：182-183）の一部を発展させたものである。

►8 談話標識の「怎么说」は本来の疑問代名詞の「怎么」と動詞の「说」を組み合わせた、表現の仕方を尋ねる表現から文法化されたものであり、「怎么说呢」「怎么说啊」などの変異形とともに日常会話に頻繁に使用されている（郑＆蒲（2009），刘（2013））。本研究は刘（2013）に従い、「怎么说呢」などの変異形と「怎么说」を区別しないで議論を行う。基本形と変異形の違いを分析するためには、間投助詞「呢」「啊」の意味・機能を詳しく検討する必要があり、今後の課題とする。

►9 日本語の「なんというか」や「なんか」とほぼ対応しているが、本稿では例文の日本語訳の中では訳さないで、「怎么说」をそのまま用いる。

►10 刘（2013）では、3つの情報の性質は「复杂性」「负面性」「敏感性」と呼ばれている。

(14) 医生：“你　　到底　　要　　酒　　还是　　要　　命　啊”
医者　あなた　とうとう　要る　お酒　接続　要る　命　文末助詞
(医者：いったいお酒と命、どっちが大事なわけ？)
老杜：“怎么说呢？　我　　都　　想　　要,
杜さん 怎么说呢　　私　すべて　したい　要る
要　　酒　　是　　为了　　度命,
要る　酒　である　のために　生き延びる
要　　命　　是　　为了　　喝　酒”。
要る　命　である　のために　飲む　酒
(杜さん：怎么说呢、両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。)

(15) A：你　真的　　不　　顾及　　我们　朋友　的　情面　　吗？
あなた　本当に　否定　配慮する　私たち　友達　の　情実　文末助詞
(A：本当に私たちの関係を考えてくれないの？)
B：怎么说呢，我　　不想　　失去　我们　的　友情,
怎么说呢　私　したくない　失う　私たち　の　友情
但　　我　更　　不想　　违背　　做人　　的　原则。
しかし　私　更に　したくない　背く　人として　の　原則
(B：怎么说呢、私たちの友情を失いたくないけど、
人の道に背くわけにはいかない。)

(16) A：你们　　现在　关系　　到底　　进展　　到
あなたたち　現在　関係　とうとう　進展する　まで
什么　　程度　　了？
どんな　程度　文末助詞
(A：あなたたちの関係は今いったいどうなっているの？)
B：怎么说呢，　我们　同居　　了。
怎么说呢　私たち　同棲　文末助詞
(B：怎么说呢、もう同棲してる。)

(刘（2013：42-43）より修正後引用、日本語訳は筆者による)

(14) の例では、医者の質問に対して、杜さんは簡単にお酒か命かを選べないという、二者択一ではない複雑な答えを出している。(15) の例では、Bの答えは相手が期待している答えではなく、相手にとっては否定的な情報を伝達している。(16) の例では、Bの答えは個人的で、言いにくい面があり、微妙またはセンシティブな内容を含んでいる。これらの例における「怎么说」の使用は、応答の始まりを示すのと同時に、後続する情報の性質を前もって示唆することで、話し手の責任を軽減する、または聞き手にもたらす不快感を軽減するといった対人的機能を果たしているとされている。

次に、刘（2013）は発話の中に出現する「怎么说」は、話題を先に進める機能や陳述を先に延ばす機能を持つことを指摘した[11]。

►11　刘（2013）では、「话题推进」と「陈述延迟」とされている。

(17) 社会　治安　吧，　怎么说，我　总觉得　比较　乱。
社会　治安　助詞　怎么说　私　どうやら　わりに　秩序のない
(社会的治安はね、怎么说、わりに混乱しているように思う。)

(18) 我们　家　呀，　虽然　我　是　在　学校　里　工作
私たち　家　助詞　接続詞　私　である　で　学校　中　仕事
这么　多　年，可是　我　的　孩子　都　是
こんなに　多い　年　でも　私　の　子供　すべて　である
“文化大革命”当中 的　这个，　怎么说，　被　耽误　的　一代。
文化大革命　中　の　ええと　怎么说　受身　立ち遅れ　の　世代
(うちはね、私が学校で長年働いているが、でもうちの子供たち皆は「文化大革命」のなかで、この、怎么说、立ち遅れた世代だ。)
(刘(2013：43，45)より修正後引用、日本語訳は筆者による)

例(17)は、「怎么说」の直前に社会的治安という話題を提起し、その後でその話題について陳述している。「怎么说」は、先行する節の話題を際立たせるのと同時に、聞き手に後続する陳述を期待させる。すなわち、「話題-陳述」という形で、話題を先に進めることが実現されているのである[12]。(18)では、話し手は話している途中で一時的に適切な表現が見つからなくなり、「怎么说」を使用することで、発話権を維持しながら、陳述を先延ばししている。

曹(2014)も似たような観点から、「怎么说呢」を対象とし、談話における分布及びその機能を記述している。曹(2014)は、「怎么说呢」は独白体の発話にも対話体の発話にも出現できるが、対話体における出現頻度の方が極めて高いと述べている。また、独白体の発話における「怎么说呢」は適切な表現が見つかっていないことを示唆する機能、前述の観点についてのさらなる解釈・説明を示す機能、話題と説明・評論の間に使い、思案中であることを示す機能、独白的な発話を終える前に使うまとめの機能があると述べられている。一方、対話体における「怎么说呢」は、答えを提示する機能、微妙な話題を回避する機能、反対意見や否定的評価を婉曲に伝達する機能、話し手の躊躇を示しながら発話の継続を維持する機能を挙げている。

3.2 「怎么说」と話し手のメタ認知

呂(2015)は「怎么说呢」の使用について、話し手の立場からより認知的な議論を加えている。呂(2015)は、「怎么说呢」は話し手のメタ認知がコミュニケーションの過程を監視・調節する表現の一つであると説明している。すなわち、「怎么说呢」は、話し手が自分自身の情報の伝達や聞き手が情報を受け取る状況などを監視・調節している時の「言語的形跡」であると考えている(呂2015：94)。(19)を見てみよう。

(19) 还有　她　那　笑，　也　说不上　妩媚，
接続詞　彼女　あの　笑い　並列副詞　とまでは言えない　艶やか
也　说不上　妖娆，　更　说不上
並列副詞　とまでは言えない　艶めかしい　更に　とまでは言えない

►12 刘(2013)によると、「話題-陳述」の他に、「観点-解釈」、「情報-詳述」、「観点-補充」などの形もあり、いずれの形においても、「怎么说」は話題を先に進める機能を持っている。

天真烂漫，怎么说呢，　总之　　令　我　觉得　　放射
天真爛漫　怎么说呢　とにかく　使役　私　感じる　放射する
出　　一种　独特的　美丽，也　　显示　　出
方向補語　一種　特有の　美　も　はっきりと示す　方向補語
性感　　的　成分。
セクシーである　の　成分
（彼女の笑顔も、艶やかとも言えない、艶めかしいとも言えない、天真爛漫とはもっと言えない、怎么说呢、とにかく独特な美しさを発散して、セクシーな一面も出しているように感じる。）
（呂（2015：88）より引用、日本語訳は筆者による）

(19) では、話し手は「彼女の笑顔」について話している同時に、メタレベルで自分の発話と聞き手の理解を監視する。自分の叙述が十分適切ではなく、聞き手に「笑顔」の様子を細かく正確に理解してもらえない可能性があると気づき、「怎么说呢」を使用して時間を稼ぎながら、発話を修正しているのである。

3.3　先行研究の4つの問題

先行研究は「怎么说」が出現する文脈的条件やその使用がもたらす効果を明らかにしているが、次の4つの問題点がある。

まず、2つの理論的問題がある。第一に、これらの先行研究は「怎么说」の現象的な特徴を観察し記述してはいるが、現象の背後にあるメカニズムについての理論的な枠組みに基づく説明が不十分である。第二に、先行研究は基本的に話し手の立場を取り、話し手の観点から「怎么说」を使用する文脈や位置、ないし「怎么说」を使用する時の話し手の認知的活動などについて論じているが、「怎么说」によって引き起こされる聞き手の認知プロセスについては十分に論じていない。この2点に対して、本稿は、関連性理論の枠組みで提案された手続き的意味の観点から、聞き手の発話解釈の過程を考えることによって先行研究で観察された「怎么说」の使用と機能の特徴を統一に説明することを試みる。すなわち、「怎么说」は聞き手の認識的警戒を活性化する手続き的意味を持つという分析を提案する。さらに、これが聞き手の認知プロセスの出発点になり、先行研究で記述された「怎么说」の各種の機能はここから推論によって派生的に得られたものであることを主張する。

次に、2つの経験的な問題について論じる[13]。第一に、先行研究では「怎么说」が出現する文脈の記述的な説明が行われているが、出現できない文脈については論じていない。たとえば（13）の例では、先行する発話または先行する文脈を削除すると、不自然な発話になる。しかし、先行研究の分析はなぜ（20）のような発話が不自然なのかを論じていない。

（20）？怎么说，社会　治安　吧，　我　　总觉得　　比较　　乱。
　　怎么说　社会　治安　助詞　私　どうやら　わりに　秩序のない
（？怎么说，社会治安はね、混乱していると思う。）
（楊（2016）より修正後引用）

►13　2つの経験的問題の記述は楊（2016：183-184）より引用している。

第二に、刘（2013）において、「怎么说」に後続する情報の性質の分類が主観的であり、かつ狭く限定されすぎているという問題がある。たとえば、(15)は、情報の否定性を示す例として挙げられている。しかし、人間関係は重要だが、人の道に従うことはもっと重要だという比較判断は複雑な心理活動であり、情報の複雑性を示す例としても考えられる。また、日常会話において、確かに「怎么说」に後続する情報は複雑か、否定的か、微妙（センシティブ）である場合が多いが、そうではない中立的な情報も続けられる。たとえば、(21)は、後続する情報が中立的な場合でも、「怎么说」が出現している例である。

(21)（大学で開かれたインタービュー）
主持人：那　最后　您　还　有　什么　想　对
司会　では　最後に　あなた　まだ　ある　何　したい　に対して
在场　的　年轻　朋友们　说　的　话　吗。
その場にいる　の　若い　仲間内　言う　の　言葉　文末助詞
（司会：では、最後にこの場にいる若者たちに何か伝えたいことがありますか。）
王老师：怎么说，我　还是　觉得　年轻人　要
王先生　怎么说　私　やはり　感じる　若者　すべきである
多　出去　走走，　要　见世面。
たくさん　出かける　歩く(重ね)　すべきである　見聞を広める
（王先生：怎么说、やっぱり若い人たちはもっと外に出たほうが良いと思います、見聞を広めるべきです。）
（楊（2016）より修正後引用）

本稿では、上で述べたように、「怎么说」は示唆する情報の性質を限定するのではなく、代わりに、認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案する。この分析では、「怎么说」によって聞き手は話し手の不確定性に気づき、その結果、文脈に応じて後続する情報の性質をある程度予測することが可能になる。そして、この後続する情報の性質に基づいて「怎么说」の機能が推論によって派生的に説明できることを示す。

4 手続き的意味による「怎么说」の分析

4.1 「怎么说」と高次表意の制約

楊（2016：185）ではすでに関連性理論の枠組みで、制約に基づく手続き的意味による「怎么说」の分析を提案した。すなわち、「怎么说」は聞き手の高次表意の構築に次のような2つの制約をかけていると主張した。①話し手

は「怎么说」に先行する話題についての思考が不十分であり、まだ斟酌していると解釈せよ、②話し手は「怎么说」に後続する発話において暫定的にその時点でまとめられた考えを述べていると解釈せよという2つの制約である。(14) の例（ここでは逐語訳を省略して (22) として再掲）の分析を見てみよう[14]。

►14　この分析は楊（2016：185-186）の一部を修正したものである。

(22) 医生：“你到底要酒还是要命啊”
（医者：いったいお酒と命、どっちが大事なわけ？）
老杜：“怎么说呢？　我都想要，要酒是为了度命，要命是为了喝酒”。
（杜さん：怎么说呢、両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。）

この例では、お酒と命の大事さという話題が医者の質問によって提起されている。制約に基づく手続き的意味の分析では、「怎么说」の使用によって、医者は、杜さんはこの話題について斟酌していて、暫定的に「両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです」という答えを出しているという高次表意を構築すると説明される。もし、(23) が示しているように、「怎么说」がなければ、上述の解釈とは異なる他の解釈が聞き手（医者）によって構築されるかもしれない。

(23) 我都想要，要酒是为了度命，要命是为了喝酒”。
（両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。）
(24) a. 話し手は迷わずに (23) が表す命題を確信している／b. 強く主張している／c. 医者に反発している／...

(23) の発話に対して、(24) に示したように、話し手はお酒と命の大事さについて、両方が大事であることとその理由を確信しているか、強く主張しているか、医者に反発しているという解釈のどれかを聞き手である医者が構築する可能性がある。その解釈の結果として、たとえば、医者の面目がつぶれることになるかもしれない。しかし、「怎么说」が加わると、(24) に示した高次表意の代わりに、「話し手は、「怎么说」に「先行する話題、即ち社会的治安についてまだ斟酌していて、後続節において暫定的に『混乱していると思う』と述べている」という高次表意を聞き手は構築できる。聞き手はさらに、斟酌する理由についても推論を展開することができる。たとえば、二者択一ではない複雑な答えが続くかもしれないと予測し、前もって心の準備ができる。また、暫定的に答えを述べているため、患者の強い主張や医者に対する反発という解釈が成立しなくなる。そこで、聞き手は面目をつぶされたと思うことはなくなり、聞き手への配慮という対人的機能が派生的に得られると考えることができる。

4.2 「怎么说」と認識的警戒の活性化

4.1節で見たように、「怎么说」は聞き手の高次表意の構築に制約をかける

という分析は、3.3節で示した4つの問題を解決できるが、この分析自体にも検討の余地がある。まず、第一に、これまで分析された言語表現の手続き的意味は、一般的に後続する命題に対して、推論がどのように制限されるかを規定するという性質を持っていた。しかし、4.1節で示した「怎么说」の手続き的意味は、前後2つの部分への制約を規定しているため、形式上、後続する命題に関する推論に制約をかけるという、これまでの標準的な手続き的意味とは性質が異なっている。第二に、実際の「怎么说」の使用を詳しく観察すると、必ずしもその後ろに命題が続くとは限らない場合があることが分かる。しかし、「怎么说」は高次表意の構築に制約をかけているという分析は、この後ろに命題が続かない場合をうまく説明することができない。(25) の例を見てみよう。

(25) A：最近　工作　还　顺利　吗？
　　最近　仕事　まだ　順調　文末助詞
　　(A：最近仕事順調？)
　　B：怎么说，　...算了，　还是　不　说　了。
　　怎么说　やめにする　やはり　否定　言う　文末助詞
　　(B：怎么说、...いいや、この話やめよう。)

仕事の調子を聞かれて、Bは「怎么说」を発話して、続いて何かを言おうとしていたが、最終的には何も言わずに、この話題をやめることにしたとする。本来「怎么说」に後続するはずであった発話がなくなったため、命題は現れていない。すなわち、基本的な論理形式がなく、基礎表意も高次表意も構築できないため、「怎么说」は聞き手の高知表意の構築に貢献する手続き的意味を持つと分析することは難しい。そのため、本稿では、代わりに「怎么说」の役割は、高次表意の構築を制限することではなく、聞き手の認識的警戒モジュールを活性化し、話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという気づきを聞き手に与えることであると考える。「怎么说」を含まない (26) の例と比べて考えてみよう。

(26) A：最近　工作　还　顺利　吗？
　　最近　仕事　まだ　順調　文末助詞
　　(A：最近仕事順調？)
　　B：算了，　还是　不　说　了。
　　やめにする　やはり　否定　言う　文末助詞
　　(B：いいや、この話やめよう。)

(26) では、聞き手Aは、話し手Bの心的状態に特に気が付かず、発話のとおりに仕事の話をしたくないと受け取るかもしれない。しかし、(25B) のように、「怎么说」があると、聞き手は、話し手がその時点で不確定性のある心的状態にあることに気づきやすい。(25B) では、聞き手は、話し手の不確定性に気づいているので、しばらく沈黙した後の「話題をやめよう」という発話は、

(26B) の発話と同じ程度に受け取るわけではない。(25B) の発話を聞いた聞き手は、話し手のこの不確定性のある心的状態についてさらに推論を続ける可能性がある。たとえば、話し手は本当に仕事の話を全くしたくないのか、話したいけど言い難いことがあるのか、問い詰めたら教えてくれるのかなど、より深い解釈が続くかもしれない[15]。

このような「怎么说」に後続する発話がない場合の例を考慮に入れて、本稿では「怎么说」の手続き的意味を修正し、(27) に示したように、活性化に基づいた手続き的意味を提案する。

(27)「怎么说」の手続き的意味：聞き手の推論的理解のモジュールが活性化されているという条件の下で、聞き手の認識的警戒モジュールを活性化し、発話のどこかのレベルで不確定性があるという話し手の心的状態に気づかせよ[16]。

4.1節で見た「怎么说」の2つの制約で構成された手続き的意味と比較しながら説明する。まず、「①話し手は『怎么说』に先行する話題についての思考が不十分であり、まだ斟酌していると解釈せよ」という制約は、3.3節に示した3つ目の問題、つまり先行文脈の必要性について先行研究は論じていないという問題を解消するための規定であった。本稿の提案では、「聞き手の推論的理解のモジュールが活性化されているという条件の下で」という部分はモジュールの活性化の観点からその問題を解消することができることを示している。すなわち、聞き手は「怎么说」を処理する前に、すでに何か話題や発話が提示され、推論的理解のモジュールが活性化されていない状況から、いきなり認識的警戒モジュールの活性化ができないという「怎么说」の特徴を説明する。次に、「②話し手は『怎么说』に後続する発話において暫定的にその時点でまとめられた考えを述べていると解釈せよ」という制約は、高次表意の構築に貢献する制約と考えられるが、すでに論じてきたように、「怎么说」は必ずしも高次表意の構築に貢献するとは限らないため、本稿では、「認識的警戒モジュール活性化し、発話のどこかのレベルで不確定性があるという話し手の心的状態に気づかせよ」という手続き的意味を提案する。高次表意の構築は、聞き手は話し手の不確定性を含む心的状態に気づいた後の段階での解釈と考えられる。「怎么说」は、聞き手に「話し手にはどこかのレベルで不確定性がある」と気づかせ、高次表意の構築に貢献する可能性があるが、必ずしも高次表意が構築されるわけではない。言い換えると、「怎么说」は、後続する命題に依存せずに、聞き手の認識的警戒を活性化させ、不確定性のある話し手の心的状態に気づかせるのである。命題が続く場合のみ、この気づきが話し手の命題態度の読み取りに影響を与え、高次表意の構築に貢献する。(13) の例（ここでは逐語訳を省略して (28) として再掲）を見てみよう。

(28) 社会治安吧，怎么说，我总觉得比较乱。
（社会的治安はね、怎么说、混乱していると思う。）

►15 関連性理論の枠組みで提案された「用心深い楽天主義（cautious optimism）」、「透徹した解釈法（sophisticated understanding）」などと言ったより深い段階の発話解釈につながる可能性があるが、この点についての議論は今後の課題とする。

►16 森川 (1991)、川上 (1991, 1992) に基づいて、楊 (2017) では日本語の談話標識の「なんか」は、話し手には、「認知レベル」「関係づけレベル」「言語表現化レベル」「伝達レベル」の4つレベルのどこかに不確定性があることを示していると述べた。一方、中国語談話標識の「怎么说」が示した話し手の不確定性のレベルは、現段階では「認知レベル」「言語表現化レベル」「伝達レベル」の3つが考えられる。なお、「認知」という用語は、ここでは、関連性理論が使用しているより広い意味の「認知」と異なり、話し手の物事に対する「認識」という意味で用いている。以下、本文ではこの3つのレベルでの不確定性について説明する。しかし、日本語の「なんか」との詳しい比較分析は今後の課題とする。

(28) では、「社会的治安」の話題があることによって、聞き手の推論的理解のモジュールが活性化されている。「怎么说」によって、聞き手はもっぱら理解のモジュールで処理を続けるわけではなく、一旦認識的警戒モジュールが活性化され、「話し手には不確定性がある」と気づくのである。社会的治安が混乱しているという命題が続いていて、さらに「觉得（思う)」という表現とも共起されているため、話し手には、現地の社会的治安に対する認識のレベルに不確定性があると聞き手は推論する。さらに、この不確定性に気づいた上で、後続する情報の性質を予測し始める。聞き手は、否定的な情報が続くかもしれないという予測をして、心の準備がある程度できるかもしれない。したがって、発話の聞き手へのインパクトや聞き手にもたらす不快感がその分だけ軽減される。すなわち聞き手配慮の機能が派生的に得られると考えられる。また、話し手が不確定性のある心的状態の下で情報を伝達していることに聞き手は気づいて、「『社会的治安は混乱している』という命題には（認識のレベルで）不確定性がある」のような高次表意が構築されるため、どれほど真剣に受け止めるかは聞き手自身が責任をもって決めることになり、その分だけ話し手の責任が軽減されることにもなる。つまり派生的に話し手の責任軽減の機能が得られると考えられる。

次に、言語表現化のレベルに不確定性がある場合もある。(18) の例（ここでは逐語訳を省略して (29) として再掲）を見てみよう。

(29) 我们家呀，虽然我是在学校里工作这么多年，可是我的孩子都是
“文化大革命”当中的这个，怎么说，被耽误的一代。
（うちはね、私が学校で長年働いているが、でもうちの子供たち皆は「文化大革命」のなかで、この、怎么说、立ち遅れた世代だ。）

(29) では、話し手は自分の家族の状況を紹介している。その発話によって、聞き手の推論的理解モジュールが活性化されている状態になっている。次に、「怎么说」によって、聞き手の認識的警戒モジュールが活性化され、「話し手には不確定性がある」と気づくのである。この例は、「文化大革命」の時代を背景にした発話であり、話し手の不確定性とは、子供達に「立ち遅れた世代」という名称を付けても良いかどうかという言語表現化レベルに不確定性があると考えられる。つまり、聞き手が「怎么说」によって与えられたのは、情報を理解するための制約というより、むしろ話し手の不確定性への気づきである。聞き手は話し手の不確定性に気づいたところから、さらに推論を展開させることができる。たとえば、現時点においてはうまく表現されていないが、もう少し待てばそれなりの適切な表現が見つかるかもしれないと聞き手は予測し、発話を待つ可能性が高い。その結果、話し手は発話権を維持することができるという「怎么说」の談話的機能が派生的に得られると考えられる。それと同時に、不確定性を伴う表現であることに気づいたため、聞き手は情報を深く信じ込まずに、軽く受け止める姿勢を取ることも考えられる。

最後に、伝達レベルに不確定性がある場合の例として、(15) の例（ここでは逐語訳を省略して (30) として再掲）を見てみよう。

（30）A：你真的不顾及我们朋友的情面吗？
B：怎么说呢，我不想失去我们的友情，但我更不想违背做人的原则。
（A：本当に私たちの関係を考えてくれないの？）
（B：怎么说呢、私たちの友情を失いたくないけど、人の道に背くわけにはいかない。）

（30）では、AとBの間の友情が考慮されているかどうかという話題で、聞き手Aの推論的理解モジュールが活性化されている状態である。話し手Bが「怎么说」を発話したことで、聞き手Aは、認識的警戒モジュールが活性化され、話し手Bには発話のどこかのレベルに不確定性があると気づくのである。ここでは、話し手Bは、2人の関係に配慮することができず、聞き手Aが期待した通りの答えを発話しているのではなく、話し手Bには伝達のレベルに不確定性があるということが示唆されている。聞き手Aは、不確定性がある話し手Bの心的状態に気づいた時点から、推論を展開し、否定的な答えが続くかもしれないと予測することによって、前もって心の準備ができる。また、話し手には「『私たちの友情を失いたくないけど、人の道に背くわけにはいかない』という命題を伝達するレベルに不確定性がある」のような高次表意を聞き手は構築し、話し手Bが強い主張をしたり、聞き手Aに対して反発したりすることによって聞き手Aの面目がつぶされることがなくなるため、聞き手への配慮という対人的機能が派生的に得られると考えることができる。

5 おわりに

日常会話の中で頻繁に使用される談話標識の「怎么说」の意味・機能について、本稿は手続き的意味のアプローチを用いて聞き手の立場からの説明を試みた。コミュニケーションの一端を担う聞き手のタスクは発話を通じて話し手の意図した意味を理解するだけではなく、それを信頼・受容するかどうかを決める必要もある（Sperber 2010）。特に音声会話は実時間で行われており、聞き手は話し手の意図的あるいは無意識の間違いや誤報、騙しなどのリスクを避けるため、認識的警戒が一層重要になり、特定の言語表現によって警戒態勢になる可能性が十分に考えられる。本稿は、Wilson（2011，2012）に従って、人間が推論的理解モジュールと認識的警戒モジュールを持っていることを仮定し、「怎么说」はすでに推論的理解のモジュールが活性化された聞き手に対して、認識的警戒モジュールを活性化し、話し手の不確定性に気づかせる手続き的意味を持つという分析を提案した。すなわち、「怎么说」は「（話し手の）思考が不十分である」あるいは「斟酌している」ことを示す高次表意の構築に直接貢献するわけではなく、認識的警戒モジュールを活性化することによって、話し手の不確定性のある心的状態への気づきを聞き手

に与えるのである。また、この不確定性への気づきが聞き手の認知的プロセスの出発点であり、その上で、（命題が後続する場合に）高次表意を構築したり、さらに推論を展開させたりして、先行研究で記述された各種の機能が派生的に得られることを論じた。

本稿による「怎么说」の手続き的意味の分析は、聞き手の発話解釈にかかわっている必要最低限の2つのモジュールを対象としたものであり、聞き手の発話解釈における複雑な認知的メカニズムを解明するための予備的な分析に過ぎない。また、話し手の不確定性のレベルとして3つを論じたが、他のレベルの存在や、同時に複数のレベルに不確定性がある可能性についてもまだ検討の余地がある。この点については、Sperber（2005）が示唆しているモジュールの内部構造の解明という課題とつながっており、今後考察を深めたい。最後に、本研究では、基本形の「怎么说」と助詞が付加された「怎么说呢」「怎么说啊」などを区別せずに議論を行なってきたが、それぞれの助詞も独自の手続き的意味をコード化していると考えられるため、「怎么说」とそれぞれの助詞との組み合わせによってどのような新しい解釈（推論）が生じるかを分析する必要がある。この問題については今後の課題とする。

謝辞

本稿は日本言語学会第153回大会での口頭発表を大幅に加筆・発展させたものである。研究発表及び論文執筆にあたり、さまざまな側面について多くの貴重なコメントをくださり、終始丁寧に指導してくださった上田雅信先生、学会で貴重な質問・コメントをしてくださった井上優先生、内田聖二先生、日本語の表現を丁寧に修正してくださった日高慶美さん、詳細なコメントをくださった2名の匿名の査読者に心から感謝いたします。本稿にある瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

Blakemore, D. (1987) *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. (2000) Indicators and procedures: nevertheless and but. *Journal of linguistics* 36 (3), 463-486.

曹秀玲（2014）从问到非问：话语标记的一个来源——以“怎么说呢”为例、山西大学学报（哲学社会科学版）37（4）、60-67.

Carston, R. (2016) The heterogeneity of procedural meaning. *Lingua*, 175, 154-166.

川上恭子（1991）「『何か』の不定対象と文形式」『園田語文』6、101-121.

川上恭子（1992）「談話における『なんか』について」『園田国文』13、73-82.

刘丽艳（2013）话语斟酌标记“怎么说”及其功能研究、宁夏大学学报（人文社会科学版）35（5）、41-47.

呂为光（2015）迟疑功能话语标记“怎么说呢”、汉语学报51（3）、87-94.

松井智子（2013）」『子どものうそ、大人の皮肉』岩波書店.

Matsui, T., Yamamoto, T., Miura, Y., & McCagg, P. (2016) Young children's early sensitivity to linguistic indications of speaker certainty in their selective word learning. *Lingua*, 175, 83-96.

森川結花（1991）「不定表現について：『なんか』を中心に」『日本語・日本文化』（17）、145-160.

Sperber, D. (2005) Modularity and relevance: How can a massively modular mind be flexible and context-sensitive. *The innate mind: Structure and contents*, 53-68.

楊 雯淇 YANG Wenqi

Sperber, D., Clément, F., Heintz, C., Mascaro, O., Mercier, H., Origgi, G., & Wilson, D. (2010) Epistemic vigilance. Mind & *Language*, 25(4), 359-393.

Sperber, D., & Wilson, D. (2002) Pragmatics, modularity and mind-reading. *Mind & Language*, 17(1-2), 3-23.

Sperber, D., & Wilson, D. (2004) Relevance theory. *Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell, 607-632.

Unger, C. (2012) Epistemic vigilance and the function of procedural indicators in communication and comprehension. *Relevance Theory. More than Understanding. New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing*, 45-73.

Wharton, T. (2003) Interjections, language, and the 'showing/saying' continuum. *Pragmatics & Cognition*, 11(1), 39-91.

Wharton, T. (2009) *Pragmatics and non-verbal communication*.

Wilson, D. (2011) The conceptual-procedural distinction: Past, present and future. *Procedural meaning: Problems and perspectives*, 3-31.

Wilson, D. (2012) Modality and the conceptual-procedural distinction. *Relevance Theory. More than Understanding. New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing*, 24-43.

Wilson, D & D, Sperber (1986) *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Wilson, D & D, Sperber (1993) Linguistic form and relevance, *Lingua* 90, 1-25.

楊雯淇（2016）「手続き的意味による中国語談話標識『怎么说』の分析」、日本言語学会第153回大会予稿集、182-187.

楊雯淇（2017）「手続き的意味による日本語談話標識『なんか』の分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』（24）、57-74.

楊雯淇＆上田雅信（2017）「活性化を用いた手続き的意味：日本語の談話標識『なんか』の事例研究」、日本言語学会第155回大会予稿集、234-239.

郑绮＆蒲霏（2009）“怎么说”的语法化历程、现代语文（语言研究版）、2009年第10期、36-38.

（平成29年10月30日受理、平成29年11月22日採択）